会誌のあり方と明日の学会誌

総括執筆者（座長）
八十島　義之助
正会員 工博 東京大学教授 工学部土木工学科

話題提供者
長　尾　義　三
正会員 工博 京都大学教授 工学部土木工学科

横　山　義　雄
正会員 工博(株)大林組土木本部 海外土木部工事課長

高　橋　　裕
正会員 工博 東京大学教授 工学部土木工学科

担当：会誌編集委員会

まえがき

土木学会誌は雑誌の一種にちがいない．良くも悪くも雑誌という概念の中で作られ，読まれ，かつ評価されて今日に至った．もっとも，土木学会の機関誌であるという，抜きさしならぬ重みを肩に背負ってではあるが．

ところで定期刊行物としての雑誌がこの世に生まれたのはいつか*，すべての書籍を読もうと願いながら，それが果たせない人びとの慰安のためにという目的で発刊されたのが，フランスのジュルナール・サヴァンで，今を去ること 300 年前の 1665 年であった．

日本では 200 年おくれて 1867 年，すなわち幕末の動乱期に「西洋雑誌」として柳河春三が刊行したが，これはオランダ雑誌の内容を日本人に翻訳紹介しようとの意図があったようだ．

わが土木学会誌は 40 余年後の 1914 年に発刊したが，主婦の友，講談クラブなどの大衆化された雑誌の発刊とほぼ時を同じくしている．

このような長い経過を経て今日の雑誌が形成されたのであるが，その間とわず語りに，雑誌が一般の刊行物とまた日刊の新聞とは異なった性格，位置づけがなされてきたことも事実である．それは，ニュース性は若干薄く逆に意見の開陳，伝達性は高くなる．また編集者の影響力が単行本に比べると高く，一方，少数意見発表の場としての性格は，新聞より強い，といったあたりである．

ひるがえって 60 年の歳月を経た土木学会誌の特質はどこにあるのであろうか．機関誌であるからには，当然のことながら一般の雑誌とは異なるが，片方では同じ学会から論文報告集が刊行されているし，その他の情報手段も少なからず存在する．

その中にあって，学会誌をどのように評価するか，今後の行き方はどうかなどについて，シンポジウムを進めたのである．

学会はその会員構成からいって，官公庁，建設業関係者が多く，加えて日本の学界の中枢として集まる学者がおもな構成員と見てよいであろう．今回のシンポジウムにおける話題提供者は，そのような意味で，学界から京都大学教授 長尾義三氏，一般会員から大林組 横山義雄氏，それから編集する側としては土木学会誌編集委員長 高橋 裕氏が参加された．

以下各氏の発表をまず述べる．

* 以下 18 行は，平凡社刊百科辞典を参照して述べた．

1. 個性ある学会誌を（長尾義三）

（1） 私と学会誌

学会誌を初めて手にしてから 30 年．私はそんなに進歩したとはいえないが，学会誌の内容の変化は著しいものがある．当初はアカデミックな近寄り難い印象を受けていたけれど今の論文報告集と分離されてから，不連続に読みやすいものとなったことを記憶している．このとき，学会誌は投稿者のためでなく，広い各層の読者のためという強い認識のもとに編集方針が定められたためとも聞いている．しかし，それで熱心な読者になったかというとそうでもない．パラパラ読みして，関係のありそうなところだけ読んで後は積んでおくという 30 年間である．満足しているかというとそうでもない．しかし，不満があれば言えといわれても責任ある答弁ができるものでもない．その前に，編集に関係している人びとがどれだけ熱意と細心の考慮を払っているかを思うと，そのご苦労の前に尻込みせざるを得なくなってしまうのである．しかし，学会誌とは私にとって何なのだろうか．常日ごろ思ってもみなかったことをこの機会に反省してみようと思う．土木と名のつく教室を出て，お前は土木屋だというレッテルを貼られ，同じ土木屋といわれる人びとの集まる社会があり，そこに加入すれば学会誌という機関誌が送られてくる．そこから得られる情報は，いろいろなニュースを除いて現在自分が抱えている問題とは無縁なものが多い．もっと専門的なことは，自分で情報を収集するか，別な専門の社会に加入し，そこからの機関誌による情報のほうが寄与率が大きいことが多い．

しかし，狭い分野を異にするが，同じことを考え，同じことに悩みをもつ人がいるという親近感がいだけるのは土木学会誌であることに気付く．自分とは狭い分野を異にするけれど，そこで同じ問題を違った接近法を試みていることにいろいろな刺激を受ける．しかし，本当の苦労話や裏話までは望むべくもなく，これは，くつろいで，先輩・後輩もしくは同輩どうしの話から受け取るほかはない．これは機関誌としての限界であろう．同じ土木工学に対する見方でも，ずいぶん違った考え方があるものと感じさせるし，自分の思考に制御をかけることも可能である．こういうことは同じく積んでしまう機関誌でも，他の学会誌とは性質を異にするようだ．それが何だといわれても表現のしようがないが，同じような仲間がいて同じような努力をしており，自分が困ったとき，何か教えてくれるものがこの学会誌の中にあるという親和感かも知れない．この意味で，編集委員会が苦労して選んだであろう特集記事，学会の各部門の委員会，文献調査委員会がまとめた展望や紹介記事は，私自身にとって有益である．学問や研究の最先端の水準をわかりやすく，問題点はどこにあるか明確に指摘し，今後の動向を知らせることは，機関誌としても重要な役割であろう．もし土木学会がなく，学会誌ももちろんなかったとしても，いちはやく学会に相当するものをつくり，今のような機関誌をつくらねばならないと提唱し，その実現に努力する恐らく熱心な支援者の一人としての自分をそこに見い出すことであろう．空気や水みたいなものなのであろうか．

（2） 学会誌と学会

以上ゲマインシャフト（共同社会）的心情をもちながら，ゲセルシャフト（利益社会）的現実の中に学会誌に100％ の満足をもたないのは自分が3万人会員の平均値でない以上，やむを得ないと思っている．学会誌は土木学会の定款に基づいてその編集方針を定めなければならないことから当然の帰結といえよう．契約に基づいて，自分の意思で加入しているのだから，学会それ自体を自分に近づける努力をする一方，どうしても自分とのかい離が大きくなれば脱会という手しか残らないであろう．しかし，自分の専門分野が土木であることに誇りをもちそこでの自由な活動が自分の生きがいであり，大き過ぎる表現だけれども，その分野からでないと，社会・人類とのかかわりをもてないと認識する限り，土木学会を離れることはできないであろう．学会とはそういう人びとの集まりであり，自分の不満なり悩みや行動を批判してもらえるのは，この社会しかないからである．そういった意味から学会の活動や，会員の利用の仕方にもう一つのところがないでもない．会員の疑問や悩みを受けつけ，これに，討論やコメントを加える場が機関誌の中にもう少し加えられてもよいのではなかろうか．学会誌は学会活動の反映であろうし，また，そうでなければならないわけであろうから，学会自体の活動の問題ともいえる．学会自体は専門分野の複雑・拡大化，高度化さらに会員の巨大化，多様化に多くの問題をかかえ，その活動の方向をきめるのに機動性を発揮することにおいて容易ではないが，悩みを反映することがもっとあってもよいと思われる．

（3） 学会誌と編集委員会

学会誌は毎月，各分野で活躍されている，有能な中堅の土木技術者からなる編集委員会によって編集されている．委員の方々は，前例主義の人びとでなく，どうしたわけか，気骨ある人びとで構成されている．この人びとは，土木工学の進歩，土木事業の発展，土木技術者のあり方いかんということを意欲的に考えておられる方々で

ある．活力あるこうした方々を選考しつづけることができる間は学会誌はその生命力を失うものではないと信じている．欲をいえば，その編集方針なり，編集内容についての具体的抱負なりが，理事会や，支部の総会に提出され，討論されることが望ましいと思う．私はこの場合といえども，そのときの意見を全部取り入れて，そのまま編集の方針とすることにはむしろ反対である．その意見をもとに，編集委員会で討論して，むしろユニークな個性ある特徴のある編集方針を打ち出してもらいたいと思う．多くの意見をそのまま取り入れた場合，散漫な個性のない魅力のない土木学会誌となることをむしろ怖れる．会員の意に添う学会，その学会活動を反映する学会誌の使命は，単なる最大公約数でなく，そうした意見を背景に，それらを十分に消化したうえでの個性を打ち出すことにあると思う．「読者におもねる雑誌はつぶれる」とは有名な編集長の言葉であるが，編集委員の一人一人が決して事なかれ主義でなく，自己の信念で編集の任にあたられる限り，学会誌は魅力あるものとなろう．そういう個性のある学会誌は，私の場合，私の好みに合わなくても，私にとって，土木工学とはなんだと常に迫力をもって問いかけてくるに相違ないものと思う．

（4） むすびに代えて

学会誌編集の目的を ① 土木技術者の幅広い教養，② 土木技術者の知識の普及と伸展，③ 会員相互の連帯感の培養におき，論文報告集と異なり，筆者のためでなく読者のためのもの，約3万の会員に親しく読まれるものにする．そして広い層の参加を求め，各部門ごとのバランスをとる，というような編集の基本的姿勢は賛成である．

問題は，その具体的内容，行動の実際が何であるか，また評価の基準をどこにおくかを具体的に明確にすることである．おそらく，これについて，甲論乙ばくの論議がでてくることと思う．多くの人びとの意見を聞くことも必要であるが，総花にならず，個性あるものを私は提案したい．普通号に掲載される報文の性格であるが，これは，前記した目的のどれに該当するのか疑問に思うこともある．そこに用いられた設計・施工上苦心を払ったところに焦点を合わせるとか，ニュース的に報告していただいてよいものもあるようだ．どちらかというと学会誌は，啓蒙的な部分と，学会・学問事業のレベルの情報伝達の即時性に大きな役割があるようである．現場の苦心談，現実に生じている問題，使われている新しい技術などに焦点をあてて，記者的なまとめ方のほうが，むしろ学会誌としてふさわしく，工事報告は，論文報告集に回すべき性質とも考えられる．上記した目的を再認識するならば，土木史に類する読物，境界領域に関する他分野の人の随筆（わかりやすい紹介）や学会活動，国際的な動き等，知らず知らずのうちに伝達されていくというのが一つの理想形として考えられよう．編集委員会の諸兄の間ですでに論議され尽くしていることに，あえて蛇足を加えたことになるのかも知れない．

2．建設業グループの会員にとっての学会誌

（横山義雄）

（1） 建設業グループの会員

土木学会誌 1975 年1月号 “絵でみる土木” のページに土木学会の会員の職域別の分布が示された．これによると “一般建設業” に属する会員は 21.8% を占め最大のグループを形成している．さらに類似の性格をもつ “道路” を加えるなら建設業グループとしては 22.9% に達している．

会員に配布される唯一の学会定期刊行物としての土木学会誌のあり方を討議するにあたり，筆者は主としてこの建設業グループから見た意見，希望を中心に論旨を進める．

（2） 量的充足

前記のように全会員数の約 23% を占める建設業関係の会員にとって学会誌が満足を与えているか否かを，その内容の量的面と質的面の双方から検討してみる．

土木学会誌編集方針によれば，会誌の編集目的は

① 土木技術者としての幅広い素養を養うこと．

② 土木技術者としての知識を伸ばすこと．

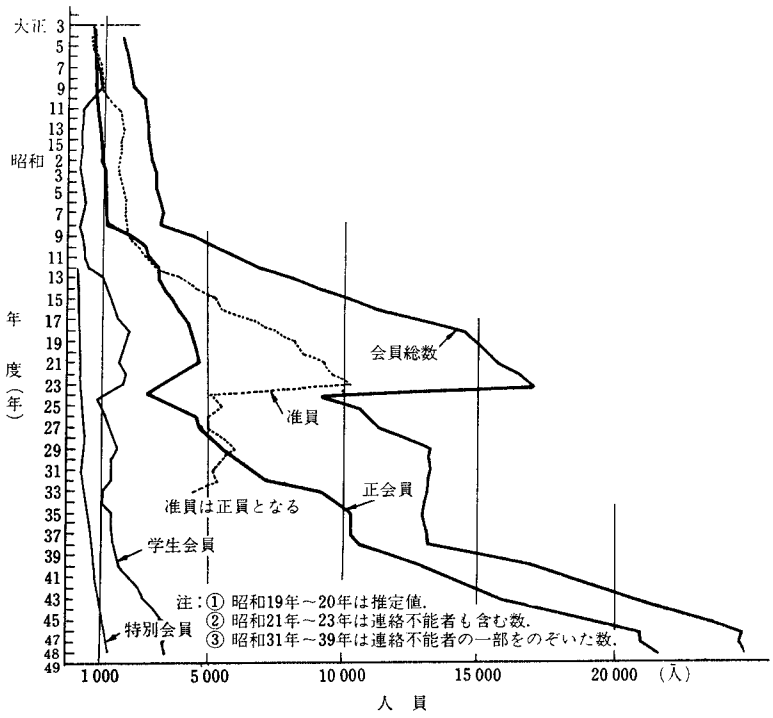
③ 土木学会員相互の連帯感を培うこと．

とされている．

しかし，実際問題として自己の日常業務に関連ある記事，自分の専門とする技術についての問題に多くの関心をひかれることは否定できない．特に建設業に属する土木技術者のうち約 80% は現場で施工に従事している．これらの会員にとっては，計画，設計あるいは基礎的理論や実験に関する記事より，施工技術，施工管理等に関するもののほうが，より卑近な問題として興味をそそられ会誌に対する親しみを増すことになるのである．

昭和 45 年 (Vol. 55) より昭和 49 年 (Vol. 59) に至る，5年間の土木学会誌に掲載された「特集」および「報告」中の論文 588 を 18 の分野に分類してその頻度を調査し図—1 に示すような結果を得た．

この分類項目中，⑭ 施工法・施工管理・契約・請負制度，が建設業グループ会員に特に関係深い項目である．また ⑫ トンネルも特殊ではあるが，施工に対する関連が非常に深いといえよう．その他でも多少なりとも



図—1 土木学会の各年度末会員数の変化（大正4年～昭和 49 年の 60 年間，土木学会誌第 60 巻 1 月号による.）

施工に関連があると考えられる項目は多い．分類項目⑭に属する論文だけで全体の約 10% を占め，項目⑫その他の項目中にも施工関連の論文が含まれることを考えれば，少なくとも量的な面において，最近5年間の土木学会誌は，建設業グループの会員に対し相応な考慮を払ってきたといえよう．

項目⑭に分類された論文は，1) 積算，2) 請負制度を考える，3) 建設工事周辺の諸問題，4) 労働力と省力化，等の特集号に含まれたものが多い．

項目⑭に分類された論文 57 中 49 がこれら特集に含まれる．

ただここで，施工関係の論文が，特集に集中的に現われるということは，一方では他の号には少ないことを意味し，これが建設業グループ会員の継続的興味を損うとの批判も聞かれる．すなわち，各号に必ず数編の施工関係の論文が含まれている場合には，学会誌を必ず開く習慣になるが，号により一編も無いものが続く場合は，興味を失い，必要な論文さえも見過してしまうという意見である．

（3） 質的充足

量的には相応の考慮を払われている建設業グループ会員が，もし学会誌に不満をもっているとすれば，その論文の質的内容に問題があると考えられる．

会員が満足しているかどうか一概には言えないが，一般に建設業の現場事務所で購読されている土木関係定期刊行物で土木学会誌は数が多いとは言えない．他の商業雑誌のように書店で内容を見て気に入った号のみ購入するという自由度に欠けるにせよ，会員が学会誌を自分のプロフェッションに不可欠と感じていないことは否めない．一方，商業雑誌は毎号毎号が厳しい競争にさらされるだけに，対象読者である現場技術者の要求にこたえることに全力を注入し，職業上必要な問題提起と現実的解決に努めているため，より多くの興味をひくのであろう．

もちろん学会誌の性格上，経済上の採算に縛られる商業誌では取扱うことの困難な，長期的ビジョンや，読者は少なくとも重要なテーマも取り上げる必要がある．

また，同じ学術誌であっても，特殊な分野のみ取扱う「土と基礎」，「港湾」等に比較して，土木学会誌の読者は非常に広い分野に広がっているため，総花的性格は免れない．

これらのハンディを考慮に入れても，なおかつ学会誌の魅力を減ずる要素になっていることがいくつかあげられる．

① 論文の著者に，現場で直接施工に従事している人が少ない．たとえ施工関係の論文でも，発注者側の管理者や，建設業者でも本社・研究所等の技術者が多い．このことは，一方で現場の技術者に時間的余裕がなかったり，また論文を書いても，あまりに体験の羅列に走ったり，文章が劣ったりして，学会誌の論文として登載に不適とされるという面もある．

② ニュース性に乏しい．企画，原稿依頼，査読，訂正等の手順に多くの時間がかかり，ニュース性に乏しくなるケースが少なくない．

③ 論文の内容に具体性が欠ける．施工報告等でも表面的なものが多く，失敗例はほとんど発表されない．

④ 掲載された論文に対する討論の場が少なく，フィードバックが行われにくい．

（4） ASCE の場合

ASCE（アメリカ土木学会）は定期刊行物として，Journals, Transactions, Proceedings 等を出版しているが，月刊であること，会員には無料で配布されること

などから見て Journal が学会誌に相当する（会員以外でも定期講読ができる）.

一例として 1966 年 4 月号の目次を見ると

① ASCE は技術士登録を支持する

② オロビルダム――世界最高の盛土のための 1 億 6 500 万トンの土運搬

③ オロビルダムにおける橋梁取りこわし

④ エンジニアを施工屋に変える

⑤ 効果的土運搬

⑥ マンモス・マシンが整地のコストを軽減

⑦ 土木技術者教育

⑧ 掘削仕様を作業計画に変える

⑨ コンサルティング実務の調査

⑩ ベースプレートおよびアンカーボルトの設計

等の報文が並んでいる.

他の号も大同小異でわが土木学会誌に比べ，現場の工事そのものの報告が多いのが目につく.

各専門分野の基礎研究，理論解析等は Transaction, Proceeding のほうで発表されるものが多い. 特に, Proceeding は 13 の専門分野別論文が収録され，Construction Division のそれには，施工法，施工管理，契約等に関する，きわめてユニークな論文が発表されている. ASCE はしばしば土木技術者のサラリー調査を行い，Journal に定期的に発表している. これは経歴，資格，地域，職域等に分類し，上限・平均・下限等をグラフで示した非常に具体的かつ権威のある統計である.

一方，土木技術者の求人，求職の広告も重要なページである. したがってアメリカで事業を行うとき，施主にとっても，エンジニアにとっても Journal は土木技術者の組織を作る有力なガイドになっている.

（5） 提　　案

建設業グループの会員に親しまれ読まれる学会誌に改善するため次のようなことを提案する.

① 現場で直接施工した技術者の体験を掲載するよう努める. それには原稿依頼だけに頼らず，レポーターがインタービューし文章に表現することも考慮する必要がある.

② ニュース性の重要なものは通常の手続きによらず速報できるような方法を取る.

③ 報告はなるべく具体的に記述し，失敗例も第三者の立場に立って発表できるよう工夫をする.

④ 特集で取り上げたテーマ，報告中の重要論文等について，一回限りで終了とせず，それに対する反論，評論等も継続して，会員に討論の場を提供する.

⑤ 会員の日常業務に役立つ，統計資料，情報等を掲載する.

3. 会誌編集の変遷と現行の編集方針（高橋　裕）

土木学会は 49 年 11 月 24 日，創立 60 周年を迎え，数々の記念行事，記念出版が行われたことは周知のとおりである. 土木学会誌も，50 年 1 月号を 60 周年記念号として会員の皆さん方に配布された. 会誌編集委員会としては，60 周年を機にいくたの新企画を試みており，新しい編集方針のもとに，さまざまな工夫を行っているが今回はそれについて忌憚のないご批判をうかがい，さらにはこれからの学会誌への注文を聞きたいと考える.

（1） 会誌の略史

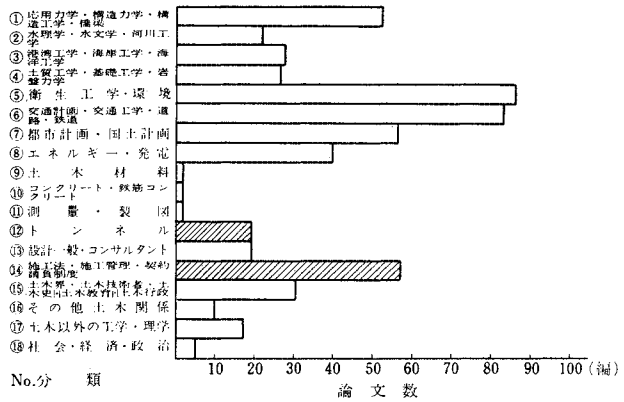
まず，学会誌の今日までの歩みを略記すればその部数は会員数と一致するので，この 60 年間の会員数の変せんを図―1 に示す. 第二次大戦直後の急減期を除いては常に漸増しつつある状況がうかがえる. 参考までに現在の他の大学会の会員数と比べれば，日本建築学会が 3 万 2 164 人，日本機械学会 4 万 2 223 人，電気学会 2 万 118 人，日本化学会 3 万 3 719 人であり，ほとんど年 12 冊の会誌を発行している（建築学会は年 14 冊）.

土木学会誌は創刊号を大正 4 年 2 月に発行して以来，昭和 3 年までの 13 年間は毎年 6 回の発行であった. 昭和 4 年 1 月第 15 巻 1 号から月刊となったが，第二次大戦末期の昭和 19 年 5 月発行後，戦火などのため休刊のやむなきに至った. 戦後，昭和 21 年 5 月ようやく第 31 巻 1 号を復刊したが定期刊行を維持できずタブロイド版の土木ニュースの発行などにより会員へのサービスに努めていた. 昭和 25 年から毎月刊行が可能となり現在に至っている. なお，論文集は昭和 19 年 3 月に学会誌臨時増刊として発足して以来逐次発行していたが，昭和 31 年 2 月に論文集編集委員会が設置されて隔月刊として定期発行されるようになって，学会誌と明確に分離されることになった. 論文集は，さらに昭和 37 年からは月刊となっている. 論文集が独自の発行を行うようになって以来，学会誌もおのずからその性格が変わり，全会員になるべく共通するテーマを選び，平易に興味深く，かつ土木界の先端をゆく話題が選ばれるようになった. 以来，投稿はもとより受け付けてはいるものの，依頼原稿の比率が増してきた.

学会誌は昭和 47 年第 57 巻より毎年 4 月に前年度の土木界を総覧する年報（Annual）も発行しはじめ，以来年間 13 冊の会誌を会員に配布している.

（2） 会誌の編集事務の現況

年間 13 冊の会誌のうち，前述の臨時増刊の年報は別として，毎年 2 冊は学会の定期的重要行事のために用意



図—2 土木学会誌「特集」および「報告」論文分類
（自昭和 45 年至昭和 49 年）

されている．それらは7月号と 12 月号であり，前者はその年度の5月末に行われた総会報告と 10 月に行われる予定の全国大会の案内である．後者はその全国大会の結果の報告となっている．残り 10 冊のうち，何冊かが適宜重要テーマをとらえて特集を編集している．特に新年号はこの約 10 年間は，総括的もしくは展望的総合テーマの特集が恒例となっている．最近 5 年間（昭和 46 年から昭和 50 年まで）の特集号は予定も含めて，前述7月号と 12 月号を別として 6.8 回であるので，特集号となった比率は約 57% となる．もっとも，特集号といっても，全巻が特集記事になるわけではなく，連載もしくは定例的記事はもちろん，特集とは別の依頼原稿や投稿原稿も掲載されている．

編集委員会の委員リストは毎号の目次の裏下に記されている．現在は委員長，幹事長を含め委員総数は 51 名であり，うち委員兼幹事は9名，支部委員は7支部からそれぞれ2名で 14 名である．幹事会は毎月1回開かれ，会誌の企画，編集，到着原稿の査読など，主として会誌発行上の事務的処理方針を審議している．委員会は隔月に開かれ，毎月の幹事会で懸案になった問題を含め会誌の方針，特集の企画，既刊号の反省その他を主として審議している．したがって，委員兼幹事にとっては会合が2か月に3回あることになる．これらの会合によって定められた事項を中心に具体的な編集事務を行っているのは，学会の編集課長以下少数のスタッフである．もちろん，委員会や編集課のデスクワークだけで会誌ができ上がるわけではない．編集課と委員長や各委員，委員と執筆者など，その間に無数の電話や文書が交換されていることはいうまでもない．また，連載“私たちの職場”でもわかるように，編集課は毎月その取材のために飛び歩かねばならず，対談とか座談会は東京以外で開かれることもまれではない．

編集委員会には書評小委員会がある．これは昭和 40 年に設けられ，以来会誌の書評・新刊紹介などの欄を毎号数ページ担当している．この委員会も月1回定例的に開かれている．また文献調査委員会は学会誌編集委員会とは独立しているが会誌編集委員会と密接な関係がある．すなわち，会誌の文献抄録に毎号6ページ，文献目録に毎号約 10 ページが割かれ，かつ年に3回程度この委員会の編集による解説記事が掲載されている．会誌編集委員会との関係を密にするため，書評小委員会委員長はもとよりのこと，文献調査委員会委員長は，自動的に会誌編集委員会委員になっている．

（3） 会誌編集の方針と意図

会誌の全般的方針については，例えば昭和 48 年 10 月号に天野光三前委員長の努力により明示されており，その基本路線は現在も変わりはない．一言にしていえば会誌は全会員のために存在するのであり，原稿も執筆者のためではなく，会員のために投稿されるべきものである．各号の具体的な編集の意図については，目次見返しの“特集にあたって”または“会員の皆さまへ”と巻末の編集後記をご覧いただきたい．編集委員会が自ら語る唯二(？)の場である．目次見返しの前言は，その号の意図を公式に披瀝したものであり，編集後記は編集の裏話を中心とした内輪話である．

本年1月号の編集後記でも触れたように，還暦を迎え転換期に立っている土木界が，次代への飛躍をどのように踏み出すべきか．将来の重要課題を先取りし，その哲学を探るのが，会誌の重要な方針であろうと考える．会誌はまた，単なる情報提供ではなく，このような難しい時期において考える会誌でありたいと思う．そのためには，会員個人の考え方，立場によって異なる主張なり意見も，それが会員相互の錬磨になるならば，おおいに取り上げるべきであると考える．なお，会員が学会誌に登場する場合には，原則として会員個人であって，背後の組織の代弁者であってはならないであろう．そのことは編集委員会委員についても，もちろん同様である．しかし，現実には，わが国社会のように所属機関への帰属意識の強い場では，それはなかなか容易なことではない．とはいえ，それを乗り越えようとする努力の過程にこそ土木技術者が社会の真の信頼を将来ともども得る方向があると考える．“考える会誌”とするためには，合意の結論が出ていないからといって，問題を避けるのではなく現存する問題を積極的に提示したいと思う．

同時に会誌は親しめる会誌，楽しめる会誌，すなわち読まれる会誌でなければならぬ．昨年より表紙を専門デザイナーによって明るく斬新にしたのをはじめ，全巻を通じレイアウトをモダンにし，活字に満ち満ちていたの

を改め若干ゆとりのある組み方にしたのも，読みやすい会誌にしたいためのささやかな新方針である．なお，4月号からは“針金とじ”から“無線とじ”にし，なお紙質も，この種月刊誌としては最高級の書籍用紙(特注)を使用している．その他，本年からいくつかの新企画“絵で見る土木”，“私達の職場”，などを連載中であり幸いなことにわれわれの耳に入る範囲では比較的好評である．

なお，投稿原稿，依頼原稿とも，編集委員会では原稿到着時において，2人の委員に査読願い，その結果を編集小委員会において発表し，議論のうえ，無条件掲載，一部加筆訂正，返却などの処置をとっている．現実には返却という例は少なく，一部加筆訂正の場合が多い．

以上が現在の編集方針であるが，委員会としては多くの会員から建設的意見をうかがい，会誌をよりよくするために努力することはいうまでもない．今回の研究討論会を企画したのも，その現われの一端にほかならない．

4. 討　　論

以上の基調発表に引き続いて，参加者からの質疑が行われた．その主なものを拾ってゆこう．

高岡（鳥取大）：会員の日常業務に役立つべきだとの意見もあるが，現場を対象としてそのような編集方針に終始しては困る．記事が，すぐ現場に役立ったり，経済効果をもたらすというのは必要条件とは言い切れない．会員の問題設定に役立ち，かつ長期的に現場技術者のためになるならよい．そして外国の雑誌に見られるような「編集者への手紙」などを活用して記事の反応を知るのがよい，などの主旨の発言があった．

鈴木（東工大）：会員は，少なくとも4～5ページを読まないと損をすると意識するような編集はできないか，あるいは土木人そのものの雑誌として，研修，土木人の家庭，保険，土木集団の生活などが題材とはならないかとの発言があった．

中村（大林組）：客観的技術的ニュース記事，人事異動などはどうか．前者については，断片的には知り得ても，新聞などに載っていると全ぼうがわからない．学会誌はその点を総括的にわからせて欲しい．後者については，やはり会員一同の関心事に違いない，との発言があった．

川田（京大）：学生の評価は土木界に対して辛い．特に建設業に就職したがらない．その理由として土木界に若者を引きつける魅力がない，初任給が低い，週休2日制が普及していない，などが表面に出ている問題であるが，それらに対して学会誌はメスを入れるべきではないか，などの種々活発な意見が述べられた．

優秀な技術・充実した設備

気象海洋総合コンサルタント

大気・海洋・湖沼・河川の環境調査・
シミュレーション・アセスメント調査

●現場測定調査　●化学分析　●海洋汚染総合測定装置の製作
●拡散数値計算　●生物分析　●海洋測定機器の製作
●予測計算　●生態調査

新日本気象海洋株式会社
本　　社　東京都渋谷区東1－19－3　TEL.03-406-7151(代)
第一技術研究所　東京都目黒区上目黒4-17-18　TEL.03-793-0591(代)
大阪支店　堺市北安井町2－12　TEL.0722-21-1626